特別助成

「コーヒー豆の栽培・販売を通して依存者の社会復帰を支援するプロジェクト」事業

パチンコ・パチスロなどの依存問題を持つ利用者に仕事と居場所を提供することで社会参加を促す

沖縄にある就労継続支援B型事業所「ワーカーズホーム」は、パチンコやパチスロの依存問題を持つ人をはじめ、アルコール、薬物などの依存問題を抱える人たちが多く利用している。コーヒー豆の栽培や販売を通して地域社会での役割と居場所を確保することで、依存問題を持つ人々が社会参加できるような取り組みが沖縄の空の下で続く。

宜野湾市大謝名にオープンした「ワーカーズホームカフェ」

カフェでは様々な依存問題を抱える人たちがコーヒーなどを提供

ホームを利用している長期利用者の次なるステップとなるためのカフェ

2013年7月に沖縄県から障害福祉サービスの就労継続支援B型事業所の指定を受け、「ワーカーズホーム」を運営しているのが一般社団法人「むら　ワーカーズホーム」である。

開設当初からギャンブルをはじめ、アルコール、薬物などの依存問題をもった方々が多く利用しているが、事業としては、ワーカーズホームの利用者と一緒に約200坪の農園でコーヒーの木を100本ほど栽培している。しかし、それだけでは少量のコーヒー豆しか収穫できないため（現状では5キロほど）、業者から生豆を購入し、選別・焙煎・袋詰めをした後で、インターネットなどを通じて販売を行っている。こうした作業を通して、依存問題をもった方々や障がいをもった方々が地域社会で自らの役割と居場所を確保できるよう手伝いをしている。また、日々の悩みごとなどの相談にも応じ、利用者が安心して通所できる環境を整えているという。

同法人の横山順一代表理事によれば、ワーカーズホーム開設以来、長期間利用してくれる人が増える傾向にある中で、現在行っている作業の次のステージに進む必要性を強く感じていたという。具体的には、お客様と直接、対面して販売できる場所、すなわち店舗（カフェ）を持つことによって、長期利用者に次なるステップアップの場を提供でき、そこで経験を積んだのち、他のカフェなどへの就職も視野に入れられるのではないかと考えたという。

同法人では、その構想を実現するための資金の確保ができずにいたが、このたびAJOSCの特別助成を受けて、昨年12月25日に宜野湾市大謝名に念願の「ワーカーズホームカフェ」をオープンすることになった。

様々な障がいを持つ利用者が無理せず働けるような利用者優先のカフェに

オープンに向けて、7月から物件探しを行い、8月に契約、9月～12月にかけて内装工事を行った。店内のテーブルや椅子の製作やカウンターの清掃は、支援してくれる医療や福祉関係のボランティアも手伝った。「いろいろな方が関わってくれたからこそ開店できた。無理せず働けるような利用者優先のカフェにしたい。緊張して注文を間違えるかもしれないが、それを面白がってくれるお客さんに来てほしい」と、横山さんは話す。

カフェでは利用者たちが自ら畑作業をして栽培した無農薬のコーヒーやブレンドコーヒーなど全6種類とネパール産の紅茶、焼き菓子などを提供し、営業は平日午前10時から午後3時までとなっている。

当初の目的であった長期利用者への新しい仕事の提供だけにとどまらず、利用者の家族や支援員がカフェで働く姿を気軽に見にくることができるのが利用者の励みになるほか、見学するほうは安心感や利用者の成長を実感できるという。カフェをオープンしてからの印象的なエピソードとして、「知的障がいを持つ利用者がカフェで自身の母親にコーヒー、焼き菓子を作り、提供し、レジ作業まですべて一人で対応したとき、『カフェで働く姿を見られるなんて考えたこともなかった』と、とても喜ばれていました。また、ギャンブル依存問題を持つ男性の利用者の方が、率先してシャッターを開けたり、荷物を運んだり、力仕事をしてくれ、女性の利用者からとても感謝され、それまで休みがちだったのが、毎日通所するようになった」と、横山さんは話す。

カフェは様々な依存問題を抱える人たちの居場所作りに寄与

助成団体:一般社団法人　むら　ワーカーズホーム　http://www.muraokinawa.org

地元の社会資源となるためにカフェを通じて様々な活動を

今回、助成をいただき、念願のカフェをオープンすることができました。地元の新聞、テレビ、ラジオなどにも取り上げていただいたことで、メディアを通してカフェの存在を知り、来店された方も多くいました。今後も地元である沖縄県宜野湾市で必要とされる社会資源でありつづけるため、カフェをどんどん活用して様々なことに挑戦していきます。

一般社団法人　むら　ワーカーズホーム
代表理事　横山 順一さん